

ヘミングウェイにおける母性の意味

— その肯定面と否定面 —

高 島 まり子

序

ヘミングウェイの描く人生がアルフレッド・ケイジンの述べた如く「永遠の戦時下にある」⁽¹⁾ことは、衆知のことである。今世紀の戦争体験を出発点として、死と暴虐に支配されて喘ぐ人間の状況とその絶望と虚無感を非情な文体で描ききり、スタイン女史の命名による「失われた世代」を代表する存在として登場し、やがては死と常に背中合わせに生きる「闘牛士」にその状況からの脱却を追求したヘミングウェイであってみれば、「暴虐と死」が彼の根本的テーマであると考えて支障はあるまい。当然ながら彼の文学の世界は、短編集の一つが *Men Without Women* という表題を持つことから示される如く、非常に男性的である。しかし、同時に彼の作品は女性無しでは存在し得ない。彼が女性に対して肯定と否定のいずれの感情を示すにせよ、女性はその作品において不可欠な役割を果たしている。*In Our Time* のニックの母親、*The Sun Also Rises* のブレット、*A Farewell to Arms* のキャサリン、*The Short Happy Life of Francis Macomber* のマーゴット、*The Snows of Kilimanjaro* のヘレン、*For Whom the Bell Tolls* のマリア、*Across the River and into the Trees* のレナータ等、数えあげれば限らない印象的な女性達が浮かんでくる。また、現実の女性が登場しない *The Old Man and the Sea* では、人間以上に女性を感じさせるような海“la mar”が物語の舞台として重要な役割を果たしているのである。従って彼の描く女性像を考察することは、彼の文学を理解する上で重要な鍵になると思われる。

女性に対するヘミングウェイの視点は、非常に単純で断定的なものに見える。ジョン・キリンガーは、ヘミングウェイが男性の人生を複雑にする程度に応じて女性を善女と悪女に分けた、と言う。そして、善女は“those who are simple, who participate in relationships with the heroes and yet leave the heroes as free as possible”, 悪女というのは“those who are demanding, who constrict the liberty of the heroes, who attempt to possess them”⁽²⁾であると言う。彼は善女の例として、ニック・アダムズ物語の小さなインディアン娘、ハリー・モーガンの妻、キャサリン、マリア、レナータを、悪女の例として、ニック物語のマージョリー、マコーマー夫人（マーゴット）、*The Fifth Column* のドロシーを挙げている。ヘミングウェイの女性像をこのように二分することは確かに可能であろう。この小論においては、ヘミングウェイの文学の出発点であり、その主人公達の体験の軸でもある第Ⅰ次大戦を中心として、基本的にはキリンガーの分類によるヘミングウェイ的善女と悪女を考察してみたい。なぜなら、第Ⅰ章において善女の原型とも言えるキャサリンを、第

Ⅱ章で“Soldier's Home”のクレブスの母親をとりあげることによって、ヘミングウェイ文学の核である戦争体験の中に女性が如何なる位置づけをなされ、如何なる感受性をもって受けとめられたかを知ることができ、それが彼の文学における女性の役割を理解する上での一助となることを期待するからである。

第 I 章

「もし人々がこの世界に多大の勇気をもちこめば、世界はそういう人達を痛めつけるために殺さなければならず、だからもちろん彼らは殺されてしまう。世界はすべての人間を痛めつけるが、後には多くの人がその痛めつけられた場所で、かえって強くなることもある。しかし、どうしても痛めつけられない人間は、世界が殺してしまう。世界はとても善良な者、とても柔和な者、とても勇敢な者をわけへだてなく殺すのだ。人間、そのどれにも属さなくとも、世界がそのうち殺してしまうことは確かで、ただその場合、特に急ぎはしないという違いはある。」⁽³⁾ 滝川元男氏は、ヘンリーのキャサリンに対する愛は、彼のこの虚無的な人生観のもとでなお生きる目的を求め、自己存在を主張しようとする努力であり、人生の暴虐に対する「抵抗」の一つであったと述べている。そしてその愛は、憲兵に捕えられる無意味な死を逃れ、軍隊を脱走し、キャサリンと共に湖水を漕ぎ渡ってスイスへと辿りつく力を彼に与えることによって、その時点までは「暴虐で残酷で不公平な人生に打ち勝ったとみななければならない」⁽⁴⁾ と言う。二人の愛をこのように人生に対する「抵抗」として受けとめれば、彼が彼女に求めたものは、人生との闘いにおいて「自分と協同態勢をとって、共に人生を耐え忍ぶ分身」⁽⁵⁾ ということになる。

確かにこの作品は、ヘンリーが気付かぬ内に「暴虐で残酷で不公平な人生」が用意した二重の罠——フィリップ・ヤングの指摘の如く「生物学的な罠」と「社会的な罠」⁽⁶⁾——にかけられており、前半では「社会的な罠」を認識した彼がキャサリンとの愛を「抵抗」の拠点としてそれから脱出するまでを、後半ではその人生との闘いも最終的に彼女の死という「生物学的な罠」によって敗北に終わるまでを描いていると言えよう。この脱出不可能な「生物学的な罠」にかかって彼女は殺され、彼は孤独と絶望の内にとり残されることによって、「抵抗」としての愛はもろくも挫折する。（この「罠」という言葉は、彼が彼女から妊娠を打ち明けられた時、「いつだって罠にかかった感じがするもんだよ、生物学的な意味で」⁽⁷⁾ という使い方をして彼女を怒らせるのだが、大きな余韻をもって上述の如くこの作品を覆っているように思われる）

しかしながら、彼女は初めから彼と共に人生を耐え忍ぶ「分身」として登場するわけでは決してない。出会いのころヘンリーは、二人の関係を単なる「ゲーム」⁽⁸⁾ としか考えていなかった。二人の恋は、決して滝川氏の述べる如く「次第に真剣な愛にたかまって」⁽⁹⁾ いったのではなく、彼が負傷後ミラノの病院で彼女と再会するや否や一挙に変質した。少なくともヘンリー自身にはそう感じられたのである。「どうも解らない。彼女と恋に落ちるなんて自分では思ってもみないことだった。」⁽¹⁰⁾ では、彼の心にこの予期せぬ転換をもたらした、「ゲーム」を「人生への抵抗」となる真剣な恋愛へと変質させたものは何であろうか。この問いに対する解答は、この時点の前後における彼の内面的変化を考察することによって与

えられるであろうし、その考察によって我々は彼らの愛の「抵抗」としての本質をより深く理解することができるであろう。

負傷以前のヘンリーに際立った特徴は、自分が参加しているこの戦争に対する非現実感と主体性の欠如であろう。前者については、自分は戦死なんかしない、「こんなのは自分とは何の関係もありっこないのだ。映画の中の戦争ほどにも、僕自身にとって危険とは思われない」⁽¹¹⁾ という彼の非現実感は、第一節をしめくくる「しかし、コレラは喰いとめられ、結局、軍隊でこれにかかって死んだのは、わずか七千名にすぎなかった」⁽¹²⁾ という非情な文体で表現された悲惨な現実と強烈な対照をなす。一方、彼の主体性の欠如は、自分の入隊の理由を明確に説明できない点や戦友達との会食の描写に、また休暇に彼が本当は行きたかったアブルツィに行かず、戦友達の勤めるままに都会にでかけて感覚的な快楽に身を任すことだけに時を費やしたことに明らかである。彼は、戦友達が望む通りの単純な人間——酒を飲むこと、食べること、眠ること、そして性的快楽の好きな——のように振舞っている。彼は、行動の基準を無意識の内に周囲の人々、あるいはそれに代表される社会に置いた生活、「数の一つとなって群集の中に混じり、自己自身を忘却喪失してしまう生活」⁽¹³⁾ を送っている。この時点の彼は、「自己自身の何であるかを問うことを忘れ、自己自身であろうとする努力をしないで」軍隊における「日常生活に埋没している人々」⁽¹⁴⁾ の一人に過ぎない。このような内面的状況を精神的な死と呼ぶことも可能であろう。

その彼が「社会的な異」を認識し、主体性に目覚める過程は、いくつかのエピソードによって語られる。まず、休暇から戻ってみると自分の不在によって軍隊の機能が何の支障もきたさなかったという事実には彼は一抹の虚しさを覚える。軍隊が必要としているのは彼自身ではなく、だれでもかまわなかったのである。彼は、現代人が「平均化された数の一つ、大衆の中の一員として集団の中に埋没し……だれとでも、極言すれば何とでも取りかえられる単位とならされつつある」⁽¹⁵⁾ ことをかすかに認識したのである。キャサリンは、この個々人としての人間存在の無意味さに既に気付いていた。というのは、恋人が負傷して自分の勤める病院に運び込まれることを夢みていた彼女のロマンティックな期待を無惨に裏切って、その恋人は粉々にふきとばされて戦死したからである。現代において、人は名誉ある戦死などできず、ただ突然、不条理に殺されるに過ぎない。ヘンリーの空虚感は、前戦に出なくてもすむように故意に脱腸帯を落とした兵士によって更に強められる。彼を助けようとするヘンリーの努力も虚しく、彼は前線に送られ、その個人的抵抗は無駄に終わった。更に、戦争の不条理で残酷な実体は、攻撃しなかったために一列に並ばされ、十人目毎に銃殺された兵士達の話によってより生々しく呈示される。人間が自分自身のために始めた戦争が、いまや人間を機械的に殺してしまうことさえあり得るというのだ。それでもなおヘンリーは闘う意味を信じようとし、戦争ほど悪いものはないという部下の言葉に、敗戦はもっと悪いと答える。そのような対話の後、彼は負傷するのである。

ニック・アダムズ、*The Sun Also Rises* のジェイク、*Across the River and into the Trees* のキャントウェル大佐等、ヘミングウェイの主人公達によって同様の戦傷体験がこれほど繰り返されることから作者自身の最初の戦傷体験のもつ意味の深さが推測できよう。作者が名状しがたい恐怖感を味わったことは、後に“Now I Lay Me”や“A way You'll Never Be”に描かれるが、そのような強烈な肉体的精神的苦痛がヘンリーに一種の覚醒をもたらしたこともまた事実であろう。死の恐怖

に圧倒され、その支配力に翻ろうされる無力な自己存在を垣間見た彼は、一瞬の内にそれまでの一連のエピソード——粉々にふきとばされたキャサリンの前の恋人、脱腸の兵士、十人目毎に機械的に銃殺された兵士達の話——をついに自分自身のものとして実感するに至ったことであろう。彼は圧倒的な死の支配力に直面し、いわば「現実」に突き落とされ、そこに戦争の実体を見、それ以前の「非現実感」は吹きとばされ、今や自分の置かれている状況を、即ち「社会的な罌」にかかって身動きのとれない無力な自己存在を明確に認識し得たに違いない。

加藤宗幸氏は、ヘミングウェイの主人公達が生命の危機に臨んで直面した境地を実存主義のいわゆる「限界状況」と捉え、その瞬間に彼は、「自己を含めた世界の一切がその存在の意義や目的を失って」いき、「事物化し無化し去ろうとしている自分自身を知り」、「人間はなんらの理由もなしにこの人間喪失の世界に投げ出されていることを知り、だれも自己に代わって生存を決定してくれるものはない」ということを知るのだと言う。従って、その一瞬が彼に「自己自身は自己が引き受けねばならず、人間はみずからつくるところのものより以外の何ものでもないという自覚」を持たせ、「完全な主体性の回復を志向させ、絶望のかたの自由の境地へ進み出させ、主体的生存の出発点に立たせる」ことになるのである。¹⁶⁾ とすれば、この「限界状況」は、精神的な死から新たな生への転換をもたらす覚醒の一瞬であるとも言えよう。いわばヘンリーは、「限界状況」に突き落とされてそれ以前の群集の中に自己自身を忘却喪失した客体としての生存から主体的生存へと進み出たのである。その直接的な結果が既に述べたキャサリンに対する彼の感情の急激な変化であり、「ゲーム」から真剣な純愛への神秘的な変質は、当事者ヘンリーのこのような内面的変化の表われであったのだ。従って、彼女に対する愛は、彼にとって「完全な主体性の回復」をめざす営みであり、「事物化し無化し去ろうとする」自己に彼がみずから与えた存在意義であり、精神的な生を獲得しようとする試みなのである。同時にそれは、対外的には既に述べた如く「抵抗」として捉えることができる。そして、その「抵抗」の対象、即ち彼の意識が捉えた当面の敵——「人間の主体性を奪い、人間を客体化し、人間を道具存在、事物存在へと追いやる人間疎外の原理を体したもの」¹⁷⁾、いわば精神の死をもたらすもの——は、戦争という「社会的な罌」の内包する不条理で残酷な死の支配力であり、ひいては社会そのものであった。が、より本質的には、「限界状況」が彼に認識させた、それ以前の彼の「数の一つとなって群集の中に混じり、自己自身を忘却喪失してしまう」主体性の欠如した生存、即ち精神的な死であったとも言えよう。

しかし、この時点では「栄光、名誉、勇氣あるいは神聖といった抽象名詞は、村の名、道路の番号、河川の名、連隊の番号、日付けなどの具体名詞と並べると、いかにも猥雑なのだ。」¹⁸⁾ という旧来の抽象的価値の否定にも表われる彼の「抵抗」は、「社会的な罌」にかけられた自分自身を認識した上で、依然としてその中で心理的な「単独講和」¹⁹⁾ にとどまっている。彼の「抵抗」がその罌をはねのけるのは、カポレットの退却の無秩序な混乱にこの罌の究極的な不条理性を認識した時である。部下のアイモは敵と誤解されて殺され、彼自身は、自分の部隊を離れたという理由で無意味に将行達を銃殺している野戦憲兵にドイツ人スパイと間違えられて殺されようとする。既に彼が捨て去った正義や秩序などの抽象的な価値の名のもとに無意味に人間を殺していく軍隊を見、自分もまた不条理に殺されようとした時、彼はそれに対する忠誠心や義務感を失い、軍隊を捨ててキャサリンとの愛の世界に脱出するのである。この時点で、彼の「主体的生存」が「社会的な罌」の中では不可能であり、その罌を脱出し、そのもた

らす不条理な死の支配力から逃れ、その罫をはった社会そのものを否定することによってのみ可能であることを彼は知ったのだ。彼は軍隊から脱走することによって、肉体的な死と同時に精神的な死からも脱出したと言えよう。

それでは、この愛は最終的に彼に「主体的生存」を実現させ、精神的な生を獲得させることができたのであろうか。この問いに答えるべく、二人の愛の実体を考察してみよう。キリンガーは、彼に対するキャサリンの愛を“the ideal love of a woman for a man —— a love in which she loses her being but has it in the being of her man”⁽²⁰⁾と呼び、石一郎氏は「男性奉仕の原始的愛情」⁽²¹⁾と定義している。「あたし、あなたの望んでいращることを言うわ、そして、あなたの望んでいращることをするわ」「あたし、あなたのしたいことがしたいのよ。もうあたしなんでもものは、何にもありゃしないの。あなたのしたがつてることだけしかないの」⁽²²⁾このような彼女の言葉からは、確かに二人の指摘するようなヘンリーに対する没我的な愛情が読みとれる。また、カーロス・ベイカーが述べる如く、彼女は“home”と山地のイメージに結びついている。彼の入院先の病室、彼が前線に復帰する前に立ち寄ったホテルの一室、そして脱走後に再会した時に共に眠ったベッドなど、彼女の居る場所はすべて彼にとって“home”に変わる。“Because she can make a ‘home’ of any room she occupies……Catherine naturally moves into association with ideas of home, love, and happiness”⁽²³⁾というベイカーの言葉の通り、作者は彼女に外界——「社会的な罫」のもたらす死と暴虐——からヘンリーを守る隠れ家である“home”を象徴させようとしている。そして、その“Home-concept”は、「山地に結びついて、山と乾いた空気と平和と平静、それから愛情、健康……」⁽²⁴⁾に結びつき、脱走後の彼の前に彼女は「……『山地の女神』として現われ、スイスへの逃避をヘンリーに勧め、彼をスイスの『山地』へ招くのだ」⁽²⁵⁾と石氏は述べる。

しかし同時に、この“Home-concept”の否定的な面、即ち彼を外界の敵から守ると同時に外界から遮断し、閉じ込めるというイメージを無視することはできない。病院のベッドの上で彼が彼女の長く豊かな髪をほどき、垂れ下がった髪の中に二人とも入ってしまい、「ちょうどテントの中か滝の後にでもいるような気分になる」⁽²⁶⁾という描写、脱走の後、彼女の居るミラノまで彼女のことを思いながら狭い貨車に潜り込んで運ばれる場面などは、そのような否定的なイメージを持っている。また更に、彼女が彼を主体性のない幼児のように扱うのを見ると、我々はこの“Home-concept”に「母胎」のイメージを重ね合わせたくなるのである。ミラノの病院で彼女は言う。「体温はとてもすばらしいし、まるでちっちゃな坊やみたいに、枕をかかえて、それをあたしだと思ってねんねするんですものね。」⁽²⁷⁾二人の愛が真剣な純愛へと変質した後、彼らの関係の原点は患者と看護婦のそれであり、彼女は彼を一方向的に世話し、彼は彼女に依存している。脱走後は、彼に「今は、もし君と一緒に居てくれなけりゃ、僕はこの世ですることが何一つ無いんだからね」⁽²⁸⁾と言わせる状態であり、スイスへの脱走も絶望にかられて虚無的に死を受け入れようとする彼をせきたてるようにして彼女が実現させたのである。従って、主観的には作者の意図に沿って「男性奉仕の原始的愛情」の具現者である彼女も、客観的にはむしろ彼に対して主導権を握り、彼の精神的肉体的な傷をいやす母親のイメージをもつ結果となっているのではあるまいか。彼が「社会的な罫」に捕えられた無力な自己存在を認識し、抽象的な価値基準は崩壊し、自己の「主体的生存」を実現させるために社会全体を拒絶せざるを得なかったことによって精神的にも肉体

的にも深く傷ついた時、「母胎退行」の対象として彼女に慰いを求めたことは不思議ではない。

ユングによれば、心理学的に見ると、現代人が自分を取り巻く状況を打開する道を見出せぬが故に自然や故郷や自分の過去にあこがれやノルスタルジーを抱く時、彼が通過する精神的再生の過程は“the longing to attain rebirth through a return to the womb”⁽²⁹⁾を前提とし、そのような精神的再生の過程の象徴は、「太陽神話」⁽³⁰⁾の中に「夜の旅」⁽³¹⁾として見出されると言う。

Every morning a divine hero is borne from the sea and mounts the chariot of the sun. In the West a Great Mother awaits him, and he is devoured by her in the evening. In the belly of a dragon he traverses the depths of the midnight sea. After frightful combat with the surpentine of night he is born again in the morning.⁽³²⁾

とすれば、キャサリンは、ヘンリーの精神的再生過程における第一段階であるところの「偉大なる母」の役割を果たしていると言えよう。

ここで注目すべき問題は、ヘンリーの再生の実体がキャサリンへの「母胎退行」の域を出ないことである。彼女の創り出す「母胎」に復帰した後、暗い「母胎」の中で平和な眠りをむさぼっている胎児のような彼の姿が描かれている。「僕はだめなんだ。君が居てくれなけりゃ、もうまるで生活というものがないんだ」⁽³³⁾と彼は言う。彼女が顎髭をはやすように勧めると「いい思いつきだ。これで僕にも仕事ができるわけだ」⁽³⁴⁾と答える。彼の心理状態は、主観的には愛に満たされながら、客観的には脱走以前に戦友達との一体感の中に自分を見失っていたころのものと非常に似通っている。即ち、彼の「社会的な異」への「抵抗」であり、「主体性の回復」であり、精神的な生を獲得しようとする試みであったはずの彼女への愛が、スイスでの平和な生活において彼にとって新しい精神的な死をもたらす支配力となってしまっているのである。彼の「夜の旅」において、“home” 即ち「偉大なる母」の「母胎」の快適さに主体性を魔痺させられたまま、彼はそこから一歩も前進できない。我々は、ユングのいわゆる「母胎退行」の欲求にフロムの説による一面のあることを想起すべきであろう。エーリッヒ・フロムによれば、大人は人生の危険と負担について幼児以上の自覚をもっているため、無力な幼児が母親に対して多大の愛情と世話を求めるのと同様な熱意をもって確実性と防衛と愛情を与えてくれる力を求めるという。こうして人は、生まれた瞬間から子宮の暗闇へ退行しようとする傾向をもつというのである。⁽³⁵⁾ これは、まさにヘンリーの心理状態を適確に説明していると言えよう。そのような状態が続いて彼女が彼の「主体的生存」を求める再生を失敗に導いてしまうのか、あるいは新しい心理的段階が二人の間に開けて彼の再生が成功し得るのかは、彼女が死んでしまう原作からは読みとれない。

ともあれ、原作においてはキャサリンはヘンリーを再生に導くことはできなかった。彼は、いったんは「社会的な異」のもたらす精神的な死を脱出することはできたが、愛の結果である彼女の死に直面して結局は再生の舞台を失ってしまうのである。彼女の死によって彼は、二人の“home”を失い、精神

的な死から逃れてその懐にとびこんだところの「偉大なる母」も人生の内包する「生物学的な罫」に対して無力であることを思い知らされる。彼の「夜の旅」の舞台となるべき「母胎」たる彼女を失って、彼は精神的再生の途中で再び「暴虐で残酷で不公平な人生」の真只中に放り出されたのである。死産に終わった彼らの赤ん坊は、キャサリンという「母胎」から精神的に再生する前の状態で投げ出されたも同然のヘンリー自身を象徴しているとも言えよう。なまみの女性によって創りだされる“home”は、一つにはその有限の肉体に立脚しているが故に一時的なものに過ぎないのである。これら二つの事実、即ち彼女の肉体の有限性によって彼が再生途中で放り出されたこと、そして仮に生きながらえたとしても二人の意志とは無関係に、彼女は彼にとって「社会的な罫」に代わる新たな精神的支配力となって彼の主体性を奪い、精神的な死を招くことがあり得るということによって、彼の精神的再生の舞台としての彼女の役割は挫折するのである。

以上、キャサリンの役割をヘンリーの意識面から捉えれば、人生に対する「抵抗」としての愛を共に創造する「分身」であり、精神的な死から脱出する原動力ともなる存在であるが、無意識的には精神的再生過程の第一段階としての「母胎退行」の対象たる「偉大なる母」であること、また彼女の死によって、「分身」としての役割も精神的再生の舞台としての役割も果たされなかったということを見てきた。同時に、二人の健康な肉体が維持できたとしても——即ち、「生物学的な罫」から自由であったとしても——精神的な死を彼にもたらす可能性があるということは、恋愛の内に潜む新たな「罫」として認識しなければならないであろう。

第 II 章

前章で、心理的視点から見ると、互いに愛し合っている男女の間でも、女性が男性の「主体的生存」の実現を阻止し、彼に精神的な死をもたらす新たな支配力となる可能性を「恋愛の罫」として指摘した。それでは、戦争体験を中心にして、主人公に精神的な死をもたらす女性像をもう一人とりあげてみたい。アメリカ版 *In Our Time* の中の短編“Soldier's Home”の主人公クレブスの母親である。

遅過ぎた帰還のゆえに自分の置かれた状況と自分自身との間に大きなギャップを感じて苦悩するクレブスは、加藤氏の指摘の如く、ヘンリーの戦後の姿であるし、作者のそれにも重なるであろう。彼は最初、戦争のことを話しながらなかったが、後には「ともかく話を聞いてもらうためには嘘をつかねばならないことに気付き」⁽³⁶⁾、その結果、自分の体験に嫌悪感をもつようになる。

A distaste for everything that had happened to him in the war set in because of the lies he has told. All of the times, that had been able to *make him feel cool and clear inside himself* when he thought of them; the times so long back when he had done the one thing, *the only thing for a man to do*, easily and naturally, when he might have done something else, now lost *their cool, valuable quality* and then were lost themselves.⁽³⁷⁾

[italics not in the original]

このようにして、彼が「男の為すべき唯一のこと」をしていた日々は、二重の意味で失われてしまう。嘘をつくことによってかくも貴重な自分の体験を事実と違うものにしてしまった上に、その嘘をつくという行為自体が「男の為すべき唯一のこと」に反するからである。彼と彼の故郷の生活との間に横たわるギャップは、彼が戦争において見出した真実と故郷での日常生活に潜む虚偽との間のギャップであることが判明するのである。では、彼の日常生活に潜む虚偽の実体とは何であろうか。昌頭に出てくる二枚の写真を見てみると、戦場にでかける前とその後の彼の変化が描かれている。

Krebs went to the war from a Methodist collage in Kansas. There is a picture which shows him among his fraternity brothers, all of them wearing exactly the same height and style collar.

.....
There is a picture which shows him on the Rhine with two German girls and another corporal. Krebs and the corporal look too big for their uniforms.⁽³⁸⁾

最初の写真の「高さも型も全く同じ襟」は、クレブスが他の学生達との一体感の内に真の自分自身を見失っていたことを示す。彼は、恐らく、その「襟」の象徴する抽象的価値観に何の疑問も抱かず、それにふさわしい行動をとることを当然とし、無意識の内に人間を客体化する「社会的な罫」に捕えられていたに違いない。一方、戦場では、彼は制服より体が大きすぎて制服は窮屈なのだ。このことは、彼が軍服に象徴される支配力を超脱していることを暗示する。帰郷後、彼は日常生活の中に、出征前は気づきもしなかった「社会的な罫」を見出したのである。そして、それが彼の意志に反して彼に嘘をつかせるのである。

では、クレブスが戦闘の中で見出した真実とは何であろうか。何が彼に「心の内が冷たく透き通るように感じさせ」たのか。この点については、次の7章のスケッチが重要な手掛かりとなるであろう。

While the bombardment was knocking the trench to pieces at Fossalta, he lay very flat and sweated and prayed, "Oh, Jesus Christ get me out of here... I believe in you and I'll tell everybody in the world that you are the only thing that matters. Please, please, dear Jesus."... The next night back at Mestre he did not tell the girl he went upstairs with at the Villa Rossa about Jesus. And he never told anybody.⁽³⁹⁾

死がこの兵士を襲った時、彼は我を忘れて神に祈った。しかし、それは彼が本当にキリストを信じていたからではない。それほど真剣に彼を祈らせたのは、死の恐怖以外の何ものでもなかった。人間には抵抗しがたい暴虐の死の圧倒的な力は、彼をそれまで知らなかった自分自身の無力な姿に直面させたのである。これは第Ⅰ章で考察したヘンリーの負傷の体験に通じるものであり、クレブスもまた彼同様に人間の存在が「社会的な異」に支配される無力な存在に過ぎないこと、群集の中に自己を喪失していた客体としての生存から主体性の回復を志向して精神的な生を獲得せねば自己は無に終わるということを悟ったに違いない。だれにもこの体験を話さず一人でその自覚の重みに耐えている姿が、最後の一行に暗示されている。では、一体何がクレブスのこのような体験を「心の内が冷たく透き通るように感じさせる」貴重なものに変えたのであろうか。ヘンリーは恋愛にすべてをかけることによって虚無感から脱し、主体性を回復したが、クレブスの場合はどうであろうか。「彼はりっぱな兵士だった。そう気づくことは重要なことだった」⁽⁴⁰⁾ というからには、彼にとって「為すべき唯一のこと」とは、死に対する絶望的な恐怖感にも拘らず闘い続けることであったに違いない。従って、彼が虚無感から逃れた経過は、次のように説明されよう。戦闘中、不条理な死が彼を脅かした時、彼は、人間が不条理な死の支配下にあり、個人の存在は究極的には無に過ぎない、ということを悟った。が、戦闘の経験を積むにつれて、彼は心理的にきたえられ、ハードボイルドな精神を獲得した結果、神に祈る代わりに死の恐怖に耐えて闘い続けたに違いない。彼は「男の為すべき唯一のこと」に身を捧げることによって、自己存在にみずから意味を与えようとする。クレブスにとって戦場で死の支配力に打ち勝ち、自分の義務を果たし続けることが、即ち「主体的生存」の実現であったのだ。

しかしながら、帰郷したクレブスは戦線で抵抗した「社会的な異」を故郷の日常生活の中に見出すのである。日常における精神の支配力は、保守的な道徳律、習慣、常識、宗教といった形をとって人間を従わせ、個人の存在を虚偽に満ちた無意味なものとし、その虚偽に対してクレブスは嫌悪感を感じるのである。彼は、ヘンリーと同様に、これらの抽象的な価値がそれ自体無意味なばかりか、人間に精神的な死をもたらす支配力でもあることを知っている。しかも、見逃がせないのは、彼がその支配力を自分の母親の中にも見出す点である。彼の母親は、息子に何が起こったのか全然理解できない。彼女は、彼に適当な職につき、結婚し、社会の習慣や道徳律に従って生活して欲しいと思う。その上、彼女は彼を神に祈らせようとする。要するに、彼女は、彼が戦場での体験によって獲得した人生の実体を忘れ去り、日常の中で精神的に死んでくれることを望んでいると言えよう。クレブスは、「社会的な異」の支配力が母性愛という仮面をかぶって現われたことに気づく。

“Don’t you love your mother, dear boy?”

“No,” Krebs said.

His mother looked at him across the table. Her eyes were shiny. She started crying.

“I don’t love anybody,” Krebs said.

It wasn’t any good. He couldn’t tell her, he couldn’t make her see it.⁽⁴¹⁾

人間は、不条理な死に支配されており、人間存在も、その生死もすべて偶然なのである。自分の存在に意味を与えるものは、自分自身を肉体的にも精神的にも殺そうとする支配力に対する「抵抗」しかない。従って、親子の絆も偶然という意味以上のものは持たず、既成の母性愛という概念は、もはや彼の気持ちを動かすことはできないのである。しかし、彼はだれをも傷つけないのであきらめて彼女に従う。

"I didn't mean it," he said. "I was just angry at something. I didn't mean I didn't love you."...

"All right," his mother said chokily. She looked up at him. "I believe you, Harold."

.....
"I'm your mother," she said. "I held you next to my heart when you were a tiny baby."

Krebs felt sick and vaguely nauseated.⁽⁴²⁾

彼を「小さな赤ん坊」に退行させようとする母性愛の仮面をかぶった支配力は、彼に吐き気を催させる。それは、彼やヘンリーやスケッチやの兵士を脅かした死の支配力と同様に、彼を精神的に殺そうとする一種の力である。クレブスの母親は、彼の「主体的生存」の実現を阻止し、真の自分自身たろうとする彼を支配し、社会の因襲の中に彼を再び組み込もうとする「社会的な罫」の象徴なのである。しかし、母親と彼女の圧倒的な支配力のもとに置かれた「小さな赤ん坊」の関係というパターンは、第一章で考察したヘンリーとキャサリンの場合とは対照的に、ここでは明らかに強い反発をもって描き出されている。

以上のように、我々は第一次大戦をテーマとした初期のヘミングウェイにおいて、女性は母性と密接な結びつきををもって描かれ、肯定的には主人公を死の支配力から救い出し、その傷をいやす母親として、また否定的には彼の「主体的生存」の実現を阻止して精神的な死をもたらす支配力の象徴として登場するという結論に達した。しかし、作者の肯定的、否定的取扱いにかかわらず、客観的には母性は精神的な死をもたらす可能性を宿していると言えるのである。

注

(1) Alfred Kazin, *On Native Grounds* (Doubleday & Co. Inc. 1956),

(2) John Killinger, *Hemingway and the Dead Gods* (Univ. of Kentucky Press, 1966), p. 89.

(3) ヘミングウェイ全集 第4巻:アーネスト ヘミングウェイ、『武器よさらば』(三笠書房、竹内道之助訳、1974), p. 196.

(4) 滝川元男、『ヘミングウェイ再考』(南雲堂、1967), p. 71.

(5) *Loc. cit.*,

- (6) Philip. Young, *Ernest Hemingway : Reconsideration* (G. Bell & Sons Ltd. 1952), p. 93.
In the end, a man is trapped. He is trapped biologically—in this case by the “natural” process that costs him his future wife …… and is trapped by society — at the end of a retreat, where you take off or get shot. Either way it can only end badly, and there are no other ways.
- (7) ヘミングウェイ, *op.cit.*, p. 114.
- (8) *Ibid.*, p. 28.
- (9) 滝川元男, *op.cit.*, p. 70.
- (10) ヘミングウェイ, *op.cit.*, p. 78.
- (11) *Ibid.*, p. 34.
- (12) *Ibid.*, p. 8.
- (13) 加藤宗幸, 『ヘミングウェイ・ノート』 (九州大学出版会, 1982), p. 99.
- (14) *Ibid.*, pp. 99–100.
- (15) *Ibid.*, p. 100.
- (16) *Ibid.*, p. 101.
- (17) *Ibid.*, p. 102.
- (18) ヘミングウェイ, *op.cit.*, p. 148.
- (19) *Ibid.*, p. 191.
- (20) Killinger, *op.cit.*, p. 91.
- (21) 石 一郎, 『ヘミングウェイ研究』 (南雲堂, 1972), p. 65.
- (22) ヘミングウェイ, *op.cit.*, p. 88.
- (23) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: The Writer as Artist* (Princeton Univ. Press, 1970), p. 104.
- (24) 石 一郎, *op.cit.*, p. 63.
- (25) *Ibid.*, p. 66.
- (26) ヘミングウェイ, *op.cit.*, p. 93.
- (27) *Ibid.*, p. 84.
- (28) *Ibid.*, p. 202.
- (29) C. G. Jung, *The Collected Works* (Routledge & Kegan. paul)
- (30) 元田修一, 『エデンの探求』 (開文社, 1973), Vol. 5, p. 212.
- (31) *Ibid.*, p. 90.
- (32) Jung, *op.cit.*, Vol. 8, p. 153.
- (33) ヘミングウェイ, *op.cit.*, p. 235.
- (34) *Ibid.*, p. 234.
- (35) エーリッヒ, フロム, 『悪について』 (紀国屋書店, 1971), p. 127.
- (36) ヘミングウェイ全集 第1巻: アーネスト ヘミングウェイ, 『われらの時代に』 (三笠書房, 高橋正雄訳, 1973), p. 57.
- (37) Ernest Hemingway, *In Our Time*, (New York: Charles Scribner's Sons, 1958), p. 90.

- (38) *Ibid.* , p. 89.
- (39) *Ibid.* , p. 87.
- (40) ヘミングウェイ, *op. cit.* , p. 60.
- (41) Hemingway, *op. cit.* , p. 99 - 100.
- (42) *Loc. cit.* ,